

平成二十五年に実施しました「まちを元気にする文化プロデューサー育成講座」にあたり、ご指導をいただきました(社)全国公立文化施設協会のアドバイザーで音楽評論家の佐藤克明先生からいただきました第一回目と最終回まとめの資料をここに紹介して、文化プロデューサーの目指すものや、その役割を理解いただき、「元気なまち」の創造に是非参加してください。

文化プロデューサー

育成講座の第1回へ

文化プロデューサーとは

何をする人が



佐藤 克明

1、わたしたちが目ざすもの

「プロデューサー」とは

創り出す)に前置詞のpro(プロ、前に)がついたProduce(前に導く、案内する、さらに伸ばす、育成する、促進する、向上させるなどの意味)が元で、educ(エドゥーコ、引き出す、行動を起こさせる、引き上げる、育成するなど。英語のeducationの語源)と近い言葉です。

ここでいうプロデューサーは、以下の文化の範囲にあるさまざまな活動を企画し、それを実現するために必要な人に依頼し、あるいはそういう人を探し、予算を立てて財源を確保し、宣伝・広報をし、その分野の専門家や協力者、催しの参加者を集め、実施とその後の計画を作るなど、あらゆる知恵と力を出して、次に続けていく人のことです。

映画やテレビ、劇団などでは「制作(者)」「製作(者)」と書くこともあります。

文化の範囲

文化をもっとも広い意味にとると人間が作りだした物はもとより、風習、伝承、制度など無形のものも含むすべて、ということになって、とらえどころがありません。

そこで、国の文化芸術振興基本法(2001年施行)では、

文学、音楽、美術、写真、演劇、舞踊その他の芸術
映画、漫画、アニメ、コンピュータその他の電子機器等を活用した芸術
雅楽、能楽、文楽、歌舞伎その他我が国古来の伝統的な芸能講談、落語、浪曲、漫談、漫才、歌唱その他の芸能
茶道、華道、書道その他の生活に係る文化
有形・無形の文化財とその保存技術
地域における文化芸術、伝統芸能、民俗芸能の活動

などの振興を図るとして、文化芸術の範囲を示しています。(以上のほか、芸術家の養成、国語、日本語教育、著作権、国民の鑑賞機会、高齢者・障がい者・青少年などの文化芸術活動、学校教育における文化芸術活動、劇場・音楽堂等、美術館・博物館・図書館等、地域の文化芸術活動の場などと、国が振興を図るべき対象は、文化芸術の周辺に及んでかなり細かく挙げられています。)

この講座では、地域で行われているさまざまな文化活動を、これから

行うものも含めて、対象として考えていきます。わたし自身は、ここでは上記の項目の「その他」に含まれている奇術(マジック)、折り紙、建築、工芸、食文化、あるいは舞台監督、各種デザイナー、編集者、劇作家、演劇やダンスの評論家、DJ、といった分野の重要性も感じていきます。

皆さんはどのような分野を付け加えたいですか?

文化プロデューサー

まちを元気にするために、これらの活動を企画し、実現する人たちが文化プロデューサーです。「まちを元気に」とはどういうことか。企画や実施はどのようにするのか。それは、この講座の次回から具体的に学びます。

2、子どもを視野に入れる

文化プロデューサーの企画は、子どもから高齢者までを対象にしています。働いている人たちが、不安定雇用など、現在の労働環境からして十分に文化に触れられず、精神的に疲弊しきって、中には心の病いになる人も少なくないこと、あるいは卒業して就職したくても、数十社も

履歴書を出し、就活しても目ざす仕事には就けない人が多いことなどを考えると、文化の創造性を生かして何か支えることができないうものかと思えます。高齢者にも、次第に動く範囲が狭くなることなどによって、孤独な環境に置かれる人も少なくありません。そうしたおとなたちの文化とともに、子どもをめぐる危機的な問題が多発している昨今、子どもが人間性豊かに育ち、自立する力をも身につけ、仲間と連帯してよりよい社会を形成していくために、「今こそ子どもたちの文化を」と、文化プロデューサーに意識してほしいものです。

ここでは、その重要性を強調するために、敢えて「地域のすべての子どもを視野に入れた活動を、第一義的に考えて下さい。子どもを考えない文化に未来はありません」と言い切っておきます。

「子どもは将来の観客・聴衆」「後継者」などといいます。それは一面では正しいのですが、わたしは「現在の観客・聴衆」でもあり、自ら企画し、創造し、表現する主体にもなる人たちだと思っています。この講座では第6回（10月19日）に「子どもたちがプロデューサーになった」

という紹介もあります。【子供という字は、おとなのお供だという意味があるからと、「子ども」「こども」という表記が多くなりました。また、国連総会で1989年に「子どもの権利条約」が採択され、日本は1994年に158番目に批准しました。その第三十一条には、「子どもが文化的な生活や芸術に自由に参加する権利を認め、その権利を尊重し促進するものとし、そのために）適当で平等な機会の提供を奨励する」とあります。】

3、「個」の活動と連携と

文化プロデューサーは、1、の中で述べたさまざまな分野の中で、自分もつとも関心あるものから考え始め、実行することになるでしょう。その時、「まちを元気に」という目的を、意識してみして下さい。文化とまちづくりを複眼でとらえて、企画し、実行することを考えて下さい。まずは自らが主体的に考え、行動するので、たとえば小会場で行う展示や、子どもたちに本の読み聞かせをする小さな集いを考えても、初めての準備であれば、家族や友だちや先輩などの知恵と力を借りることになるでしょう。初めてではなくて

も、それを周囲に広める段階になれば、次第に見ず知らずの人の力も借りることもなります。劇団や合唱団の公演などでも、まずはその団体が主体的に考え、動き始めますが、観客・聴衆を広げようとすれば、また、活動の質をさらに向上しようとするれば、団体独自の力だけでは十分な成果は上がらないでしょう。

「まちを元気に」が目的であれば、「個」の活動は、「孤」ではないのです。「まち」（地域社会）との結びつきを広く考えて、まち全体の文化を元気にし、そのレベルを上げるという目的を、個人の活動や自分の団体の活動に結びつけて考えるようになったとき、企画も実行も、さらには助成金を得ようとする場合も、孤独ではなく、「個の主体の確立した連携」につながっていきます。「個」の文化も、周囲から支えられ生かされてきた「まち」との連携の結果、といえるのではないのでしょうか。

この第1回は、この後、「仲間づくりからプロデューサーは始まる」として、お互いのコミュニケーションを促す体験をします。

講座としての連携の始まりです。

2013年8月10日執筆

福崎町文化プロデューサー育成講座 第1期への補講とまとめ

文化プロデューサーに必要な6つの資質を育てる

①公益性を目指す大志

きっかけは個人の趣味や思いつきであつても、それが社会にとって意義あることであるかどうか追求し、公益性を発見し、それを目的としてプロデューサーとする。

②大局観

分野と地域の広がり、さまざまな分野との連携、地元的全地域や周辺への視線、そこから全県、他県、全国、外国への視線。

中長期の観点、単年度だけでなく、3年、5年、10年などと続けることで、広がるだけでなく、短期ではできないことができるという観点。

③(②の中長期とも関連するが)継続性を重視する意識

④感性を研ぎ澄ます

⑤細部への目配りと配慮

⑥多様な文化・芸術への関心と理解を深める

講座第1期のまとめ

兵庫県では初めてという文化プロデューサー育成講座は、福崎町で行

われ、周辺の地域から参加された方々も含めて、24人が参加し、21人が修了を迎えました。

皆さんの可能性を引き出す役割を担った岡本伸子講師、竹内利江講師とともに、わたしも毎回の講座を振り返り、次の回で生かす課題と進行について工夫し改善しながら、進めるお手伝いをしてきました。

多様な文化の分野で、企画し、収支予算を立て、その実現のために多くの人たちと連携し、宣伝とチケット販売などによって参加者を広げていくプロデューサーの力は、講義を聞くだけでは身につけません。そこで、小規模な体験を取り入れたワークショップで、より実践的な学習をしてきました。それぞれに、「ヒントになった」「実際に活用してみた」「など」と思われたこともあると思います。

この閉講式で、受講者の皆さんが知恵を出し、力を集めて行う催しもまた、そうした「実践的な学習」の成果です。

しかし、これはまだ、最初の一步です。

第1回の講座でわたしは、「子どもたちのことを考えない文化芸術に、未来はない」といいました。

では、「子どもたちのことを考える」とはどういうことでしょうか？

いま小学校では、1年生から5時間の授業があるということです。親の生活も厳しい時代です。ほとんどのクラスには多動性の子もがいて、担任だけでは学級運営ができないクラスも少なくない、ということも聞きます。子どもたちのことを考え、

その実情に文化で働きかけようと思えば、学校との連携は重要な課題でしょう。しかし、学校には、かつてない難しい問題に向き合っており、そうしたゆとりがほとんどないようです。では、PTAや地域の子ども会が、学校に代わって、文化プロデューサーと連携できるのでしょうか？

こうした実情を把握し、そこにどう働きかけるかは、これからの課題です。

あるいは、「子どもたちに良い本の読み聞かせをする」という、比較的簡単にできそうな企画を具体化する上でも、その本の著作権はどうなっているのか、どこに使用の承諾を得たらよいか、著作権使用料はいくらか、などという問題に出会うことがあります。このように、考え、学ばなければならないことは、まだまだあります。

この講座の一つのきっかけになった、エルデホールの企画や事業の実施をどうしていくかということも、大きな課題です。こうした課題を残しながら、予算の限度もあり、今年度は今回で閉講します。それはまだ最初の一步とはいえ、この講座で学んだこと、出会った仲間との交流や連携を生かせば、ここからできることも多々あります。

「福崎町文化プロデューサー育成講座第1期修了」という誇らしい肩書きを大いに活用して、それぞれ活躍されますよう、講師一同、皆さん一人一人の活躍に期待し、見守り、声援をお送りします。

また、福崎町教育委員会は、「まちを元気にする文化プロデューサー」の育成講座を評価して下さり、次年度も継続する予定であるとお聞きしています。

引き続き新たな仲間を迎えて講座が行われ、まちにいつその元気をもたらすように、皆さんのさらなるお力添えをお願い致します。次年度に、またお目にかかりましょう。



まちを元気にする
文化プロデューサー養成講座
修了記念イベント

